

入 水 鐘 乳 洞 探 検

高 桑 良 興

我國には處々に洞窟が多く、中には有名なものも少くない。山口縣の秋芳洞、高知縣の龍河洞の如きはその屈指のもので、朝鮮平安北道の蝸龍窟は更に偉大なものとして知られるが、予は未だこれを探險せず、秋芳洞も偉大なものではあるが、今は餘りに人にあらされた跡が多く、龍河洞は近年の發見にかゝり、且つ地の利を得てをらぬ爲め、なほ人の力に汚されて居らぬ丈け、興味の優る點が多く、高知高等女學校教諭石川重治郎氏に依つて、近頃内部動物が調査され、約30種が得られたさうである。予も先年この洞を探ぐり、*Scleroprotopus infusus* Verhoeff なるヤスデの1新種を得て大に快を覺えたのである。東京附近では秩父鐘乳洞・日原鐘乳洞・倉澤鐘乳洞等があり、又富士山麓には大小の熔岩トンネルが多く、これらは皆學者の探檢に値し、鳥居元氏によつて *Niponosoma aroglodytes*, *Scleroprotopus longiventris*, *Lavabates takakuwai* 等の新屬新種が、その内に産することが知られてをる。朝鮮京城附近の江東石灰洞からは *Antrokoreana gracipes* が新種として土居寛暢氏に依つて發見せられ、又琉球にある諸洞窟からは、先年山階侯爵家の探檢隊に依つて *Dolichoglyphiulus asper*, *Hyliodogaster nodulosa* などの新屬新種が得られて居る。以上は皆ヤスデの種類であつて、洞窟内棲息動物の優位を占めてをるので、自然他の未見の洞窟を探らうとする好奇心をそゐるのである。本年夏八月予は福島縣磐梯山附近に採集を試みし時、偶然郡山より平に至る鐵道線に近く近來發見せられた入水鐘乳洞のあるを聞き、且つ盛夏の候が最も探險に宜しとのことで、歸來その機をねらひ、神俣驛長にもお世話になり、今は一日をも延ばし難く、十月二十二日東京にて動物學會のあるその日上野を立ち、常磐線を平にて乗り換へ、磐越本線

により、7時間を費し神俣驛に下り、徒歩5料で入水村につき。洞の発見者兼案内者である鈴木菊得氏を訪ひ、同氏の注意に依り全衣服を着換へ（コルテンのズボン等を別に持つていつた）、少々大きな携帯品は一切持つて入ることが困難であるとの事で、只弓手に蠟燭、馬手にピンセット、胸に採集管を納め、先づ漸く體を入れ得るほどの孔口に潜り込んだ。洞内は僅かに一本路を通してをるが、幅も漸く1米位で、上は何時頭をおつけるかも知れぬ位、床は30纏位の深さの水の瀬が通つてをる。滑る心配は餘りなく、兩脚を擴げて水の兩岸をつたひ、兩手を擴げて岩壁の凹凸につかまり、頭を俯せて衝突を避け、徐々に進むのである。途に當つて Kettle 狀に凹んだ水溜まりがあり、丸材を中央に通してあるのを危く踏み越へると、高さ3米幅半米位の水量の可成りに多い瀧が簾々と落下してをるその内に數段の木製階子をかけてあるが、案内者は先づそれを登り、用意せる板子と藁束とを以て、水を一時せきとめてくれるその際にその階子をよづるのである。處々六疊敷位の廣さの腔處もあるが、或は辛うじて體を入れ得るほどの堅穴に、脚先きから潜り込み、脚先きで暗中摸索をやつて岩角を辿り、或は先づ入つた案内者によつて、左へ右へと脚先きの案内をして貰ふ。或は又高さ僅かに半米横幅のやゝ廣い岩の隙間を、腹を下にべたりと岩につけ、大の字となつて横行數米せねばならぬ箇所もあり、又水深股に達する處を徒涉せねばならぬ處もあり、絶對暗黒のそれらの間を、兩手の燭とピンセットを後生大事に須臾も離さず、兩眼は絶えず光つて動物をねらひつゝ、進むのである。鐘乳石・石筍は例の如く奇觀を呈してをるが、前記の大洞窟に比しては遙かに見劣りがする。例の如く處々に恰好の地名をつけてある。六地藏の如く並ぶ石筍のある處には地藏洞と名づけ、はやお供物まで上げてある。塔の如く衝つ立つた鐘乳石のある處に五重塔、ピアノの如き音階を發し得る鐘乳石の長短の柱が並列する處に木琴洞の名が與へられ、その他雄洞・岩屋岬・龍宮等がある。蝙蝠の糞の堆積する所、尺蠖蛾の如き鼠色の蛾が岩壁にとまつてをるもあり、黒白のヤスデが動かさる如くに這つてをるのを見るに及んでは快

哉を叫ばざるを得なかつた。最終の奥までは 600 米あるさうであるが、身體の疲勞甚しく、内部の氣溫は四季を通じて 50 度位であるとのことなれども、冷水を涉りし爲めか、聊か寒む氣を催うし、且つ又同じ途を歸る困難さを想ひ、残り $\frac{1}{4}$ を略し、へとへとになつて洞を出た。洞内にて 3 時間以上を費やし、蠟燭數本を捧げ、漸く無事地上の人と成つたが、日は將に暮れんとし、冷雨蕭々として降る坂道を數町にして案内者の家に至り、先づ搾るほどに水浸りとなつてをるズボンやその他を着換へ、久しぶり昔し懷しの圍爐裏に桝柵火の恩惠を受け、玉蜀黍の鹽煮と大根の油だきといふ野趣滿々の厚志に蘇生の思ひをなし、やがて暗夜の大雨中をくゞつて數町の野途を左に滑り右にのめり、漸く國道に出で里餘にして元の驛に辿りつき、次の驛小野新町^{にいまろ}の温泉宿に老體を息めた。この驛から 5 軒山上に「鬼ヶ穴」と稱する矢張り石灰洞のやゝ大なるものがあるとのことであつたが、この度はこれを割愛し、次の日は鹽原附近をあさり一泊して歸京した。上記入水鐘乳洞は昭和 2 年右鈴木氏が發見したもので、氏は農家の人であるにもかかわらず、頗る學術的の趣味の豊かな人で、予の採集についても甚だ有益の補助を與へて下さつた事を感謝する。氏の始めて洞内を探究した時、行く先きを遮つて岩壁が垂れ、その下の隙間から水の奔出する處に出會ひ、進行が全く杜絶した。その時氏の弟某君は兄の篤志に感じ、決死の覺悟を定め、蠟燭やマッチをゴム袋に納めてそれを頸にし、腰に繩をつけその場を兄君に托し、敢然としてその岩下を潜り漸く 1 の腔室のあるを發見し、信號を以て兄君を招きよせたさうである。大勇がなくてはできぬ業である。さて右洞内ではヤスデ 2 種數十匹、イシムカデ 1 匹、箱根鯢魚 1 匹、蛾數匹を得たが不幸にも蜘蛛を見つけることができなかった。右ヤスデは 2 種とも新種らしくその 1 は正に *Mongoliulus* 屬と見てをるが、2 種ともが僅かに 2~3 匹にすぎず、大に心細く思つてをる。イシムカデも新種と思はるゝが、これは 1 匹のみで、これ亦大に困つてをる。蝙蝠は今時季遅く高く潜んでゐるので捕へることが出来なかつた。然し鈴木氏の熱心なる必ず近い内に諸種の動物を送つて

下される約束をなされ、大に楽しみを感じてをるのである。右洞は今や文部省より天然記念物として指定を受けてゐるが、土地の邊鄙なると人を招くだけの設備を缺く爲め、折角の記念物もそれほど世に知られずにある。若しこれに幾千圓を投ずるものがあり、せめて通常着のまゝ内部に入ることができるだけに人工を加へたならば、多くの人を招來し得、土地の爲にもなり、又どんな有益な研究が飛び出さぬとも限らぬと思ふ。蜘蛛同好家も一見すべき處ではあるまいかと思ひ茲に秃筆を呵したのである。

龍 河 洞 の 蜘 蛛

石 川 重 治 郎

龍河洞は高知市の東方20軒の所にある下部三疊紀の奥化石灰白色の石灰洞窟である。筆者は昨年5月頃から此所の動物を調査してゐるが既に50餘種の動物が棲息する事を確めた。内新種10, 新亞種1が確認され夫々専門家によつて續々發表されつゝある。

蜘蛛は4種居る。内3種は新種である。最初に發見されたのが

1) *Leptoneta melanocomata* Kishida [MS.] ケグロマシラグモ

全洞1軒の間に普く分布して棲息する。不規則棚狀の網を張り、年中活動してトビムシ、ミヅアブ1種等を食とする。6個の單眼は夜光眼で眞珠光澤に輝く。各部の測定は次の様である。

- | | | |
|------------|---------|------------|
| 1. 頭胸部……長さ | 0.8 mm. | 巾……0.5 mm. |
| 2. 腹 部……長さ | 1.0 mm. | 巾……0.8 mm. |
| 3. 第一肢……長さ | 9.4 mm. | |
| 4. 第二肢……長さ | 6.9 mm. | |